

ワークス

当館イチオシ！
絵図面デジタル
データ

公文書レポート

公文書にみる青年
学校

研究紹介

伊藤大介
「昭和三陸津波と東
北帝国大学」

寄贈図書のご案内

お知らせ

「昭和十一年 雑事 社雑 震嘯誌資料 六ノ五」
【S11-2011】

昭和三陸津波で被災した児童の作文です。宮城県が災害の記録『宮城県昭和震嘯誌』を編纂した際の資料として、簿冊に綴られています。

【 】は、当館所蔵資料の整理番号を表しています。

ワークス

当館イチオシ！絵図面デジタルデータ

専門調査員 澁谷 悠子

◆絵図面ってどんなもの？

当館では、主に明治期に作成された村絵図・御林絵図・寺院境内区画図・官有地図面をはじめとする絵図面 2,064 点を所蔵しています。地域の昔の姿を「絵」という分かりやすい形で示していることもあり、閲覧希望が多い資料です。

では、当館所蔵絵図面の概要を紹介したいと思います。

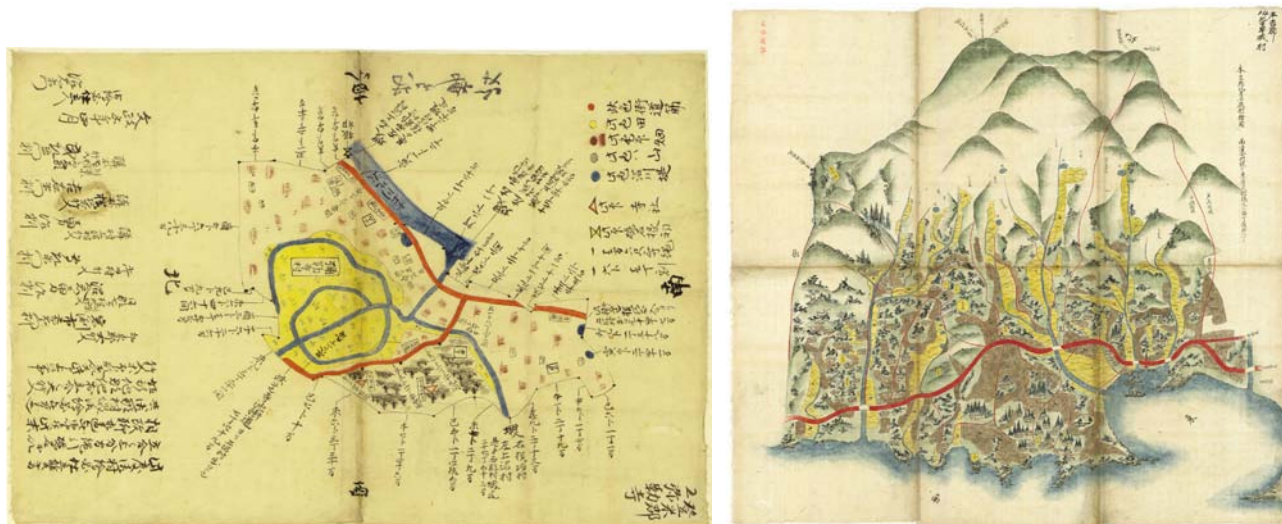
村絵図のうち、作成年が明記されているものでは、明治 20 年（1887）頃までに作られたものが大半を占めています。隣村との境、山や川、田畑、寺社などが描かれています。明治期に作成されたものは、地租改正により、県が土地の把握を進める過程で作成されたと考えられます。一部、江戸時代に仙台藩が村々を把握するために作られたものも含まれています。

御林絵図は、江戸時代に仙台藩直轄の森林を管理するために作成された絵図面を指します。廃藩置県後、行政の円滑な移行・運営を図るために県へ引き継がれました。

寺院境内区画図は、無税地であった寺院所有地のうち、県が課税対象となる土地を把握するために作成しました。

官有地図面とは、民有地に対して官が所有する土地（国有地など）の図面で、明治 20 年代頃に作られたものが多数あります。

これらの絵図面原本は、折りたたまれて収納されていることもあり、閲覧時に折り目・糊継ぎ部分を破損してしまうおそれや、彩色部分が色褪せてしまうおそれがあります。慎重な取り扱いを要する絵図面は、基本的に原本利用は不可とし、代替資料である複製シート・マイクロフィルム等を閲覧に供しています。この取り扱いは、一般的な行政文書の場合、よほど状態が悪いものを除いて、原本利用可能としている点と対照的です。



江戸時代の絵図面（左）と明治時代の絵図面（右）

◆絵図面デジタルデータの利用

絵図面の複製シートやマイクロフィルムはカラー出力されていますが、原本と同じく、時間の経過とともに色が褪せてしまいます。また、利用者が持参したデジカメで複製する場合を除いて、モノクロでの複製になってしまうという難点がありました。

これらの問題を解決するため、平成26年(2014)7月1日から絵図面デジタルデータのCD-R複製サービスを行っています。これは、データ複製を希望する絵図面をリストまたはカタログから選び、当館職員がCD-Rに複製する、というサービスです。CD-R1枚につき絵図面データ5点まで複製可能とし、CD-R1枚分の実費50円を頂戴しています。

平成27年(2015)11月現在、当館所蔵の絵図2,064点のうち、797点分のデジタルデータが利用可能です。ただし、利用時には、

- ①当館では、原則として資料の複製郵送サービスは行っておりません。ご来館頂き、資料の内容を確認した上で、複製をお申し込み下さい。
- ②複製したデータを出版物に掲載する、またはご自身のHPにアップされる場合などは、別途、申請が必要です。

以上の2点にご注意下さい。

データ複製が可能な絵図面については、公文書館HPの「絵図面デジタルデータリスト」(Excelファイル)(<http://www.pref.miyagi.jp/soshiki/koubun/hukusya.html>)をダウンロードし、確認することができます。または、公文書館に電話・メールでお問い合わせ下さい。調査・研究などでの皆様のご利用をお待ちしております。



公文書レポート

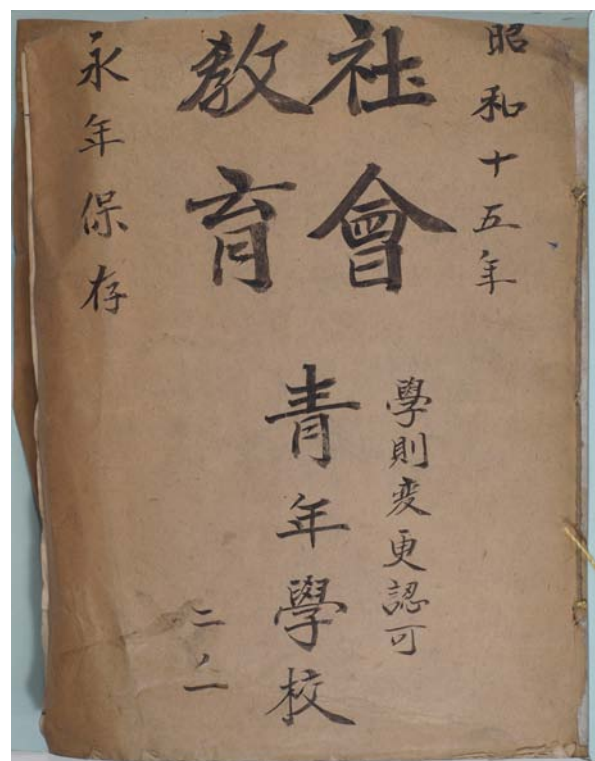
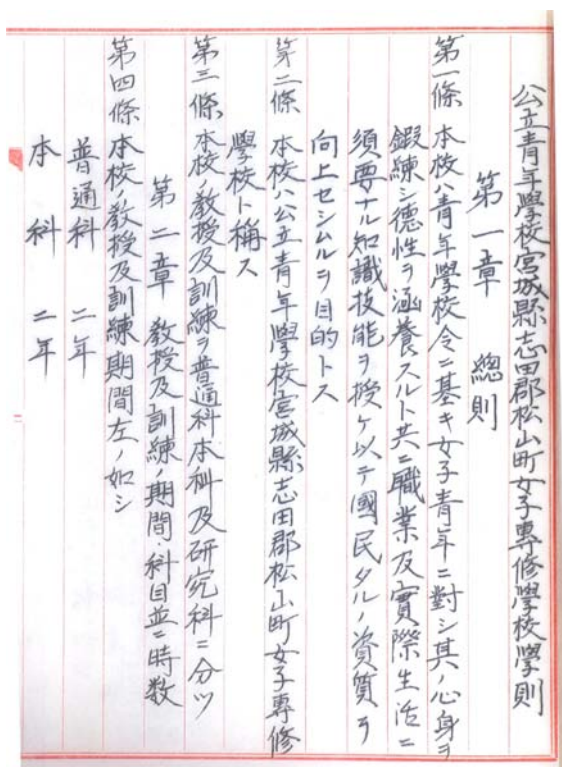
公文書にみる青年学校

専門調査員 佐々木 優実

当館の特徴のひとつとして、明治期から昭和初期にかけての学事関係の公文書を多く所蔵しているということが挙げられます。小学校や中等学校、実業学校などの学校の設置許可、校舎の設置・移転、学校への寄附採納など種類はさまざまです。そのなかでも、今回は青年学校に関わる公文書について、いくつかみていきます。

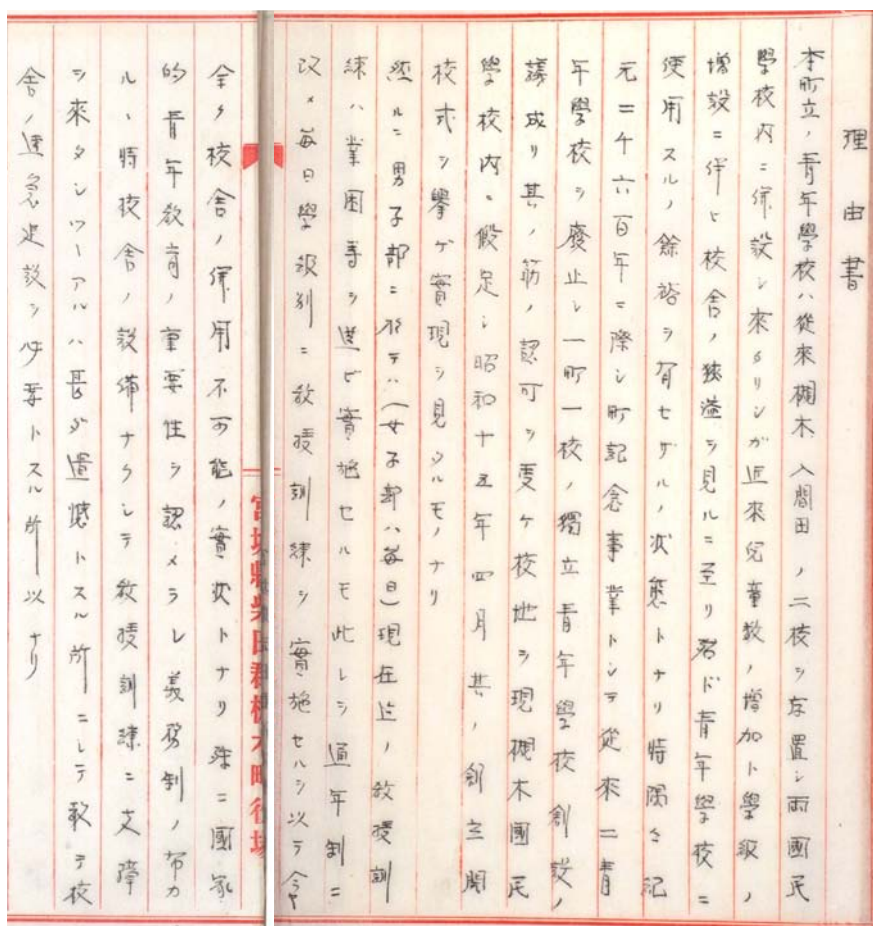
青年学校とは、昭和10年（1935）の「青年学校令」によって全国に設置されました。明治以降、小学校卒業程度の「簡易な補習と職業に関する知識技能の習得」を目的として設置された実業補習学校と、大正15年（1926）に「青年の心身を鍛練する」ことを目的として設置された青年訓練所を統一し、「男女青年に対し心身の鍛錬と徳性を涵養し職業や實際生活に必要な知識技能を習得」することを目的とした学校です。宮城県での青年学校の設置の経緯については「青年学校制度ノ実施ニ関スル件依命通牒」や「青年学校協議会要項」といった資料から見るすることができます（「社会教育 例規」【S10-20】）。普通科は尋常小学校卒業者が入学し、修業年限は2年でした。その後、普通科修了者または高等小学校卒業者が本科に入学しました。男子は5年、女子は3年の修業年限ですが、土地の状況に応じて年限を短くすることも可能でした。

基本的に青年学校は男子部と女子部を設けて授業を行っていましたが、青年学校成立以前の経緯から、女子部が独立した学校の形態をしている例もあります。



松山町（現在の大崎市松山）では農業補習学校の女子部を独立させ、昭和7年（1932）に「松山女子専修学校」を開校しました。そのため、昭和10年に開校した松山青年学校に女子部は設置されず、男子部のみで構成されています。同じように鹿島台村（現在の大崎市鹿島台）でも昭和6年（1931）に農業補習学校から女子部が分離し、「鹿島台村女子大成学校」が設置されています（「社会教育 青年学校 学則変更認可」【S15 - 2】）。

青年学校が成立してしばらくは、小学校長が青年学校長を兼任したり、小学校教員が兼任したりして授業を行っていました。校舎も、独立のものはほとんどなく、小学校の教室や校庭を間借りして授業を行っていました。青年学校工事関係の書類では、槻木町立青年学校の校舎の建築申請資料が見られます（「学事 青年学校 成人教育 私立学校建築認可 国民精神総動員」【S17 - 12】）。当時、槻木町内には二つの小学校があり、それぞれに青年学校が置かれていました。しかし、小学校では年々児童数・学級数が増加し、青年学校に校舎を貸す余裕がなくなってきました。そこで、昭和15年（1940）に槻木町の紀元二千六百年記念事業として、二つの青年学校を統一し、独立の青年学校を設置することを決定しました。



槻木町立青年学校校舎新築認可申請の理由書

青年学校の歴史は、昭和10年の開校から、戦後、昭和22年（1947）の新制中学の開校に至るまでの約12年間しかありませんでした。しかし、今回ご紹介した資料のほかにも青年学校に関する資料を当館では所蔵しています。ご興味のある方は是非足をお運び下さい。

公文書館資料が活用された 研究紹介

伊藤 大介 「昭和 三陸津波と東北帝国大学」 （『東北大学史料館紀要』9号、2014年）

専門調査員 栗原 伸一郎

東日本大震災以降、災害の歴史に対する興味関心が高まり、様々な研究が発表されるようになりました。今回紹介する論文は、東北大学史料館の伊藤大介氏が、昭和 三陸津波という災害に東北帝国大学がどのように対応したのか考察したものです。

昭和 三陸津波とは、昭和 8 年（1933）3 月 3 日未明に発生した地震と津波によって、岩手県で 1,316 人、宮城県で 170 人が死亡し、行方不明者を加えると全体で 3,000 人を超える人的被害を出した災害のことです。

本論文では、まず東北帝国大学の医学部附属医院が、被災地で様々な救護活動を展開したことが明らかにされます。また、理学部の研究者たちが積極的に被災地まで足を運び、それぞれの専門分野に基づく多様な研究活動を行い、その成果を専門雑誌や書籍、新聞紙上において公開していたことを指摘します。さらに、災害が発生する以前から要望が出されていた海洋水産科学研究所が、災害後に設置が実現したことや、災害後に要求されるようになった向山観象所の拡充が、その数年後に達成されたことを指摘します。

そして、こうした東北帝国大学の対応や施設の拡充の背景には、昭和 三陸津波が発生したことによって、国立の研究・教育機関が、農村救済や災害予防といった社会的な研究課題に対応することが求められるようになったことがあるとしています。

本論文の意義の一つは、昭和 三陸津波における宮城県の状況を調べる際の基本的文献である『宮城県昭和震嘯誌』の正確性について考察を加えたことです。この書籍は、震災から 2 年後に宮城県が発行した記念誌で、当時の宮城県知事の序文によれば、年月が過ぎるのとともに災害という「過去の苦難」は忘れられてしまうので、「古きを温ねて、新しきを知る」ために編纂されたものでした。

『宮城県昭和震嘯誌』では、東北帝国大学の医学部附属医院の救護班 11 人が、歌津村（現在の本吉郡南三陸町）方面に派遣されたと記されていました。しかし、様々な同時代の資料と突き合わせることで、この記述に問題があることが明らかになります。当館所蔵の公文書からは、東北帝国大学が派遣した救護班が複数あり、歌津村以外にも派遣されたことが確認されます。また、新聞資料からは、『宮城県昭和震嘯誌』に記される内容よりも、大規模な救護活動を展開していたことが確認されます。実際は、東北帝国大学は、少なくとも 30 人以上の人員を志津川、高田、釜石の 3 方面に派遣していました。

現在、私たちの周りには、東日本大震災に関する書籍や報告書などがあふれています。それらのなかには、『宮城県昭和震嘯誌』と同じような意図で執筆されたものも数多くあるでしょう。しかし、その記述内容が正確であるとは限りません。宮城県では、東日本大震災に関わる公文書をすべて保存することにしていますが、一次資料を残してこそ、過去の活動が検証できるのです。

寄贈図書のご紹介

平成 27 年 7 月から 10 月までに、関係各位より寄贈された図書・雑誌の一部をご紹介します。

仙台郷土研究会	『仙台郷土研究』第 40 巻第 1 号（通巻 290 号）
多賀城市	『多賀城市文化財調査報告書第一一八集 多賀城市の歴史遺産 八幡村（一）』
同	『多賀城市文化財調査報告書第一二三集 多賀城市の歴史遺産 八幡村（二）』
八王子市	『数字が語る八王子の現代』
独立行政法人国立公文書館	『平成 26 年度アーカイブズ研修Ⅲ修了研究論文集』
岡山県立記録資料館	『岡山のアーカイブズ 2 ～記録資料館活動成果資料集～』
同	『紀要』第 8 号
沖縄県	『沖縄史料編集紀要』第 38 号

このほか、たくさんの関係機関からの寄贈がありました。ありがとうございました。

お知らせ

◆ 公文書館企画展「近代のなかの伊達」のご案内 ◆

場所：東北歴史博物館 エントランスホール（入場無料）
期間：平成 27 年 10 月 21 日（水）～ 11 月 23 日（月・祝）まで
時間：午前 9 時 30 分～午後 5 時まで
休館日：毎週月曜日（11 月 23 日は開館）

場所：宮城県図書館 2 階展示室（入場無料）
期間：平成 27 年 12 月 5 日（土）～平成 28 年 2 月 26 日（金）まで
時間：午前 9 時～午後 5 時まで
休館日：毎週月曜日（祝・休日の場合はその翌平日）・図書館の臨時休館日

◆ 公文書館だより バックナンバーのお知らせ ◆

以下のアドレスから『公文書館だより』のバックナンバーをダウンロードできます。

<http://www.pref.miyagi.jp/soshiki/koubun/tayori2.html>

◆ デジタルデータの頒布 ◆

村絵図面のデジタル画像データの頒布を行っています。
平成 27 年 11 月 1 日から利用可能なデータが 115 件分増えましたので、ふるってご活用下さい。
CD-R 焼付のみでの頒布となります（1 枚につき 5 点まで 1 枚 50 円）。

榴ヶ岡時代と紫山移転後に開催された企画展の図録が CD-ROM になりました（1 枚 50 円）。
宮城県公文書館企画展示図録集 『01 ～榴ヶ岡時代～』 『02 ～紫山時代～』

宮城県公文書館だより 第 29 号

平成 27 年（2015）11 月 1 日 発行

編集・発行 宮城県公文書館

〒 981-3205 宮城県仙台市泉区紫山 1-1-1

Tel 022 (341) 3231 Fax 022 (341) 3233

E-mail koubun@pref.miyagi.jp

HP <http://www.pref.miyagi.jp/soshiki/koubun/>

